

《 論 説 》

近世後期における江戸庶民の旅の費用
—江戸近郊地の庶民による旅との比較を通して—

谷釜 尋徳

1. 問題の所在

本稿は、近世後期における江戸庶民の旅を必要経費と費用の調達という側面から明らかにするものである。近世後期の街道筋ではすでに貨幣経済が浸透していたため、庶民が旅をするためにはそれ相応の金額が必要であった。この意味で、近世後期における江戸庶民の旅の歴史を紐解こうとすると、旅費の問題に関する検討を欠くことはできない。

ところが、江戸庶民の旅の実際を伝える史料は、江戸が火災都市であったことや近代以降の震災、戦火の影響で蒐集が困難な状況にあるといわれている⁽¹⁾。そこで本稿では、史料の蒐集範囲を江戸近郊地にまで広げてみることにした。当該地域の庶民の旅も研究対象として取り込み、それを江戸庶民の旅との比較対象として設定すれば、双方の旅の相違点や共通点を浮き彫りにしながら江戸庶民の旅の特徴を捉え得ると考えたからである。これによって、江戸関連の研究に付きまとう史料上の限界をある程度克服することができよう。

これまで、近世における庶民の旅費の問題は、新城常三⁽²⁾、原田伴彦⁽³⁾、池上博之⁽⁴⁾、飯白和子⁽⁵⁾、今野信雄⁽⁶⁾、櫻井邦夫⁽⁷⁾、金森敦子⁽⁸⁾、滝口正哉⁽⁹⁾、

(1) 西山松之助「江戸町人総論」『江戸町人の研究 第一巻』吉川弘文館、1972、3～4頁。

(2) 新城常三『庶民と旅の歴史』日本放送出版協会、1971、129～137頁。／新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1982、736～741頁。

(3) 原田伴彦「江戸時代の旅行」『道中記の旅』芸艸堂、1983、217～240頁。

(4) 池上博之「世田谷の伊勢講と伊勢道中について」『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、215～247頁。

宮本常一⁽¹⁰⁾などによって触れられてきた。これら先人たちの研究は、主として道中における金銭出納帳として旅人が記録した「旅日記」の記述を取り上げたものであった。しかし、史料蒐集の範囲を特定の地域に限定して、他地域との比較史の観点から当該地域の庶民による旅費の実際を相対化しようとする試みはみられない。

そこで本稿では、江戸及び江戸近郊地の庶民による道中の旅費の傾向を彼らの旅日記を基に明らかにしたうえで両者の比較を行い、その違いを浮き彫りにするとともに、彼らの旅費の調達手段について検討する⁽¹¹⁾。これによって、江戸に暮らす「都市民」と近郊農村に暮らす「農民」との間に生じた旅の違いを「旅費」の側面から証かすことができよう。

さて、ここで本稿が対象とする江戸とその近郊地の地域的な範囲をあらかじめ明確にしておきたい。近世の江戸では身分ごとに支配系統が異なり統一した行政区画が設けられていなかったため、「御府内」(＝江戸)の範囲は長い間曖昧にされていた。こうした事態を是正すべく、幕府は文政元(1818)年に老中の決定として江戸の絵図面に朱線を引き、御府内の範囲を確定するための作業を行っている(『文政朱引図』)。現在の行政区画でいえば、概ね千代田区・中央区・港区・新宿区・文京区・台東区・墨田区・江東区・品川区の1部・目

(5) 飯白和子「伊勢参りと伊勢講―その社会経済史的側面について―」『我孫子市史研究』8号、1984.3、51～83頁。

(6) 今野信雄『江戸の旅』岩波書店、1986、169～180頁。

(7) 櫻井邦夫「旅人百人に聞く江戸時代の旅」『弥次さん喜多さん旅をする』大田区郷土博物館、1997、6～19頁。／櫻井邦夫「旅日記に見る近世の旅と宿泊」『交通史研究』49号、2002.3、46～61頁。

(8) 金森敦子「伊勢詣と江戸の旅―道中日記に見る旅の値段―」文藝春秋、2004、109～169頁。

(9) 滝口正哉「八代目紀伊国屋長三郎と嘉永四年道中記」『ある商家の軌跡―紀伊国屋三谷家資料調査報告書―』千代田区教育委員会、2006、212～227頁。／滝口正哉「江戸豪商の旅―嘉永四年の道中記から―」『交通史研究』61号、2006.12、25～50頁。

(10) 宮本常一『庶民の旅』八坂書房、2006、132～137頁。

(11) 本稿では貨幣の交換率を「金1両＝銀60匁＝銭6000文」として、近世後期頃の市場相場で計算している(大江戸探検隊『大江戸暮らし―武士と庶民の生活事情―(改訂新版)』PHP研究所、2003、38頁)。

黒区の1部・渋谷区・豊島区・北区の1部・板橋区の1部・荒川区が朱線の範囲内(=江戸)に位置していたことになる。また、朱線によって江戸の範囲が示されるとともに、町人の居住区域である町奉行の支配範囲も同地図内に黒線で定められた。

図1は、江戸やその近郊地のおおよその範囲を示す目的で『文政朱引図』を基に作成したもので、図中の外側の線が上述の「朱線」、内側の線が「黒線」

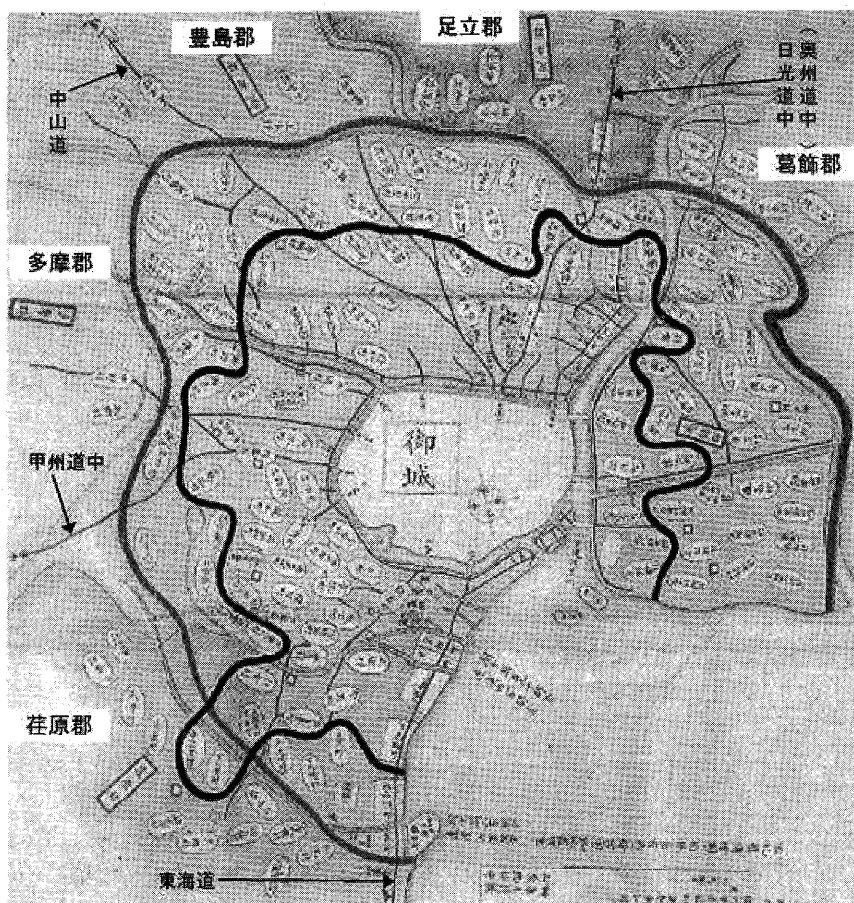


図1 江戸及び江戸近郊地の範囲

表1 江戸隣接の五郡(江戸近郊地)と現在の行政区画との対応表*

郡	現在の行政区画
葛飾郡	墨田区・江東区・葛飾郡・足立区の1部・江戸川区の1部
足立郡	足立区・北区
豊島郡	渋谷区の1部・港区・新宿区・豊島区・板橋区・練馬区・北区・荒川区・台東区・文京区の1部
多摩郡	町田市 of 1部・世田谷区の1部・府中市・国立市・小金井市・調布市・三鷹市・八王子市・日野市・福生市・青梅市・昭島市・立川市・武蔵村山市・中野区・杉並区
荏原郡	大田区・品川区・目黒区・世田谷区の1部・港区の1部

※「新編武蔵風土記稿」(1830頃)『大日本地誌大系⑦～⑬ 新編武蔵風土記稿 第一～七巻』雄山閣、1996、より作成。

である⁽¹²⁾。本稿では、この幕府によって定められた範囲に基づいて、江戸は朱線の内側、江戸近郊地は朱線の外側を指すものとして扱うものとする。

一方、朱線の外側の範囲であるが、「江戸近郊地」という地域的な概念は、江戸を除く武蔵国一帯をいうこともあれば、相州(現在の神奈川県辺り)までも含むこともあるなど明確な規定はなされてこなかった。そこで本稿では、地理的にみて江戸の都市文化をとりわけ積極的に受容したと考えられる、江戸に隣接した葛飾・足立・豊島・多摩・荏原の五郡を便宜的に江戸近郊地と規定しておきたい(図1参照)。

なお、ここで江戸近郊地として括る五郡を、天保元(1830)年頃に成立した幕府編纂の地誌『新編武蔵風土記稿』に基づいて現在の行政区画をもって示すと、おおよそ表1の如く整理される。以下、本稿において「江戸(庶民)」ないし「江戸近郊地(の庶民)」というとき、それは上記の条件設定に基づくも

(12) 図1は文政元(1818)年の『文政朱引図』(徳元昭『江戸の地図屋さん』吉川弘文館、2003、193頁、より転載)を原図とし、それに天保元(1830)年頃に成立した幕府編纂の地誌『新編武蔵風土記稿(巻之九)』に所収の「元禄年中改訂図」(蘆田伊人編『大日本地誌大系⑦ 新編武蔵風土記稿 第一巻』雄山閣、1996、194～195頁)を参考にして筆者が手を加えて作成したものである。

のである。

2. 江戸及び江戸近郊地の庶民による旅の費用

2-1 『伊勢参宮覚』(1845) にみる旅費の総額の検討

ここでは、近世後期における庶民が旅の道中で使った費用とその使い道に関する傾向を探ることにしたい。旅費の検討にあたって、ここでは弘化2(1845)年に多摩郡喜多見村(現・世田谷区)の田中国三郎という農民が伊勢参宮の際に記述した旅日記である『伊勢参宮覚』⁽¹³⁾を用いる。同史料は他の類似の史料に比して、旅の道中で使った費用が詳細に書き留められているという特徴を有しているからである。

同史料に記された旅費の総額は金5両と銭5貫771文(35771文)であった。ただし、旅人によって目的地やルート、期間が異なることが想定されるため、この金額を庶民が道中で費やした一般的な金額としてみなすことはできない。そこで、この金額を基に1人あたりの旅費の平均額を求めてみると、この旅では1日平均およそ411文を必要とした計算になる⁽¹⁴⁾。この411文という金額は、江戸庶民の大半を占めていた中下層の庶民(商人・職人)の日収とほぼ同額であり、江戸近郊地に居住する農民の日雇い賃金のおよそ3倍にあたる金額であった⁽¹⁵⁾。

江戸からの伊勢参宮は通常2ヶ月程度であったが、それでも1日400文消費すると見積もって4両(24000文)もの旅費が必要とされたことになる⁽¹⁶⁾。このことは、当時総額として4両もの費用が用立てられなければ、庶民は旅ができなかったことを示している。ゆえに、短くて数週間、時には数ヶ月間に

(13) 田中国三郎「伊勢参宮覚」(1845)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、1～8頁。

(14) 金森と石川は近世の旅における1日あたりの消費金額は400文程度が目安であったと指摘し(金森敦子『伊勢詣と江戸の旅―道中日記に見る旅の値段―』文藝春秋、2004、126頁/石川英輔「数字で読む江戸時代の東海道」『歩きたくて大名と庶民の街道物語』新人物往来社、2009、160頁)、池上はこれを300文程度と捉えている(池上博之「世田谷の伊勢講と伊勢道中について」『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、239頁)。

も及んだ遠隔地への旅費を中下層の庶民が個人負担で捻出することは不可能に近かったのである。近世後期における江戸及び江戸近郊地の庶民にとって、旅は多額の金銭消費を伴う「贅沢」な娯楽であったといわねばなるまい。

2-2 江戸庶民と江戸近郊地の庶民の旅費の比較

江戸庶民と江戸近郊地の庶民との間で、旅費の金額や使い方に違いは生じていたのだろうか。そのことを探るべく、以下では双方より旅日記を1編ずつ選び出して両者の比較を試みたい。

ここでは、江戸庶民の旅日記として神田塗師町（現・千代田区）の商人紀伊国屋長三郎が記した『道中記』⁽¹⁷⁾（1851）を、江戸近郊地の庶民の旅日記として先ほどと同じく『伊勢参宮覚』（1845）を用いる。『道中記』の著者である紀伊国屋長三郎はいわゆる「豪商」であった。そのため、農民の旅（『伊勢参宮覚』）との比較を通して、江戸の富裕な商人による旅の特徴を金銭面から浮き彫りにすることができよう。

なお、『道中記』の旅が往路では伊勢に立ち寄らずに直接京都を目指しているのに対して、『伊勢参宮覚』の旅の方は在地（多摩郡喜多見村）を出発した後、伊勢を経由して京都へ向かっている点に違いがみられる。そこで、前者は江戸～京都間の旅費を、後者は在地～伊勢間の旅費を取り上げその金額や消費

(15) 文政期（1818～30）頃の世相を描いたとされる『文政年間漫録』には、その日稼ぎの生活を営んでいた中下層の商人の一例として、江戸の裏長屋の住人を主たる担い手とする棒手振の収入に関する記述が確認できる（栗原柳庵「文政年間漫録」『未刊随筆百種 第1巻』中央公論社、1976、297～298頁）。同書に記された支出と残金の合計額からみれば、棒手振に代表される中下層の商人の日収は400文程度であった計算になる。また、『文政年間漫録』には大工の収入に関しても事細かに記されている（同上書、297～298頁）。同書によれば、文政期頃の大工の日収は銭単位で計算すると約420文となる。一方、『文政年間漫録』は豊嶋郡徳丸村（現・板橋区）の中流農民が江戸で大根を1本5文程度で売却していたことを伝えている（同上書、297～298頁）。その他、江戸近郊の世田谷地域では、日雇いで他人の農作業を手伝い駄賃を稼ぐことがあったようで、その日収は124文であったという（『村明細帳』『せたがやの歴史』世田谷区、1976、177頁）。

(16) 今野信雄『江戸の旅』岩波書店、1986、177頁。

(17) 紀伊国屋長三郎「道中記」（1851）『ある商家の軌跡—紀伊国屋三谷家資料調査報告書—』千代田区教育委員会、2006、117-140頁、150～161頁。

内訳をそれぞれ明らかにしたうえで、双方の比較を試みることにする。

① 『道中記』(1851)にみる江戸庶民の江戸～京都間の旅費

『道中記』は紀伊国屋長三郎が2人の供を連れて旅をした際の記録である。まずは、この旅日記を基に、彼ら一行が江戸～京都間の道中で費やした旅費の内容を知る目的で表2を作成した。ただし、本表には金銭消費を伴う行動の

表2 『道中記』(1851)にみる江戸庶民による旅費の消費内訳*

日付	移動区間	購入品・行動	計(文)
2月16日	江戸～保土ヶ谷	船代、食費、厄払い、宿泊費	1462
17日	保土ヶ谷～藤沢	食費、船代、賽銭、絵図購入費、薬代、入湯費、宿泊費	1400
18日	藤沢～箱根湯元	馬代、船代、食費、宿泊費	3733
19日	箱根湯元～沼津	食費、賽銭、駕籠代、髪結銭、宿泊費	2843
20日	沼津～由比	食費、船代、非人に施行、宿泊費	1194
21日	由比～府中	食費、賽銭、駕籠代、拝観料、案内賃、絵図購入費、宿泊費	3404
22日	府中逗留	食費、紙購入費、賽銭、絵図購入費、宿泊費	1690
23日	府中逗留	紙購入費、書状送料、食費、宿泊費	1425
24日	府中～島田	火縄購入費、船代、食費、賽銭、草鞋代、宿泊費	2964
25日	島田逗留	食費、髪結銭、宿泊費	1572
26日	島田～掛川	船代、食費、宿泊費	2673
27日	掛川～坂下	食費、橋銭、火縄購入費、船代、子どもに施行、宿泊費	1990
28日	坂下～石打	御札購入費、御影購入費、賽銭、食費、船代、宿泊費	3023
29日	石打～大野	荷物人足代、食費、子ども・非人に施行、宿泊費	1614
30日	大野～かとや	食費、徒歩渡し賃、荷物人足代、御札、賽銭、絵図購入費、宿泊費	2249
3月1日	かとや～御油	草鞋代、食費、橋銭、馬代、御札購入費、賽銭、手紙送料、髪結銭、宿泊費	2294
2日	御油～岡崎	草鞋代、食費、非人に施行、絵図購入費、宿泊費	1864
3日	岡崎～宮	賽銭、食費、扇子購入費、御守り購入費、草鞋代、宿泊費	2164
4日	宮～四日市	食費、船代、船頭への祝儀、非人に施行、宿泊費	2315
5日	四日市～坂ノ下	縁起購入費、食費、非人に施行、宿泊費	1948
6日	坂ノ下～草津	賽銭、食費、橋銭、船代、薬代、馬代、非人に施行、宿泊費	1644
7日	草津～伏見	食費、船代、草鞋代、非人に施行、橋銭、宿泊費	1710

※紀伊国屋長三郎「道中記」(1851)『ある商家の軌跡—紀伊国屋三谷家資料調査報告書—』千代田区教育委員会、2006、150～156頁、より作成。

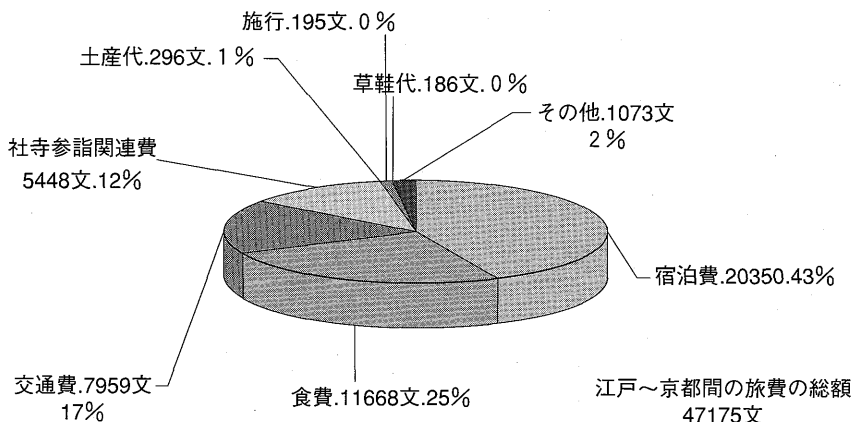


図 2 『道中記』(1851) にみる江戸庶民による旅費の消費配分*

※紀伊国屋長三郎「道中記」(1851)『ある商家の軌跡—紀伊国屋三谷家資料調査報告書—』千代田区教育委員会、2006、150～156 頁、より作成。

みを取り上げているため、ここに掲載されたものが当該区間における彼らの行動の全てを示すものではない。

次に、彼らの旅費の使い道の割合を示した図 2 より、『道中記』における旅費の消費配分をみると、多い方から順に宿泊費、食費、交通費、社寺参詣関連費、土産代、施行代、草鞋代、その他、となっている。とりわけ、全体に占める宿泊費の割合が 43% であることから、江戸庶民は旅費の多くを宿泊費に充てていたことがわかる。

この旅の江戸～京都間における旅費の総額は 47175 文であったが⁽¹⁸⁾、この値が 1 人당に要した金額であると判断してはならない。『道中記』は紀伊国屋長三郎と供 2 人の計 3 人の旅であったが、旅日記の中に例えば「八百廿四文 保土ヶ谷ふじ屋泊り 三人」⁽¹⁹⁾「三百三十式文 戸塚弁当四人前」⁽²⁰⁾などという記述がみられることからして、長三郎が供 2 人を含めた 3 人分、場合によっ

(18) 先に『伊勢参宮覚』を史料として割り出した、旅の全行程にかかった総額は 35771 文であったが、『道中記』では江戸～京都間において既にその値を上回る 47175 文の旅費が使われていることをここで確認しておきたい。

ては道中で雇った人足の分の費用まで一括して支払っていたと推すことができるからである。

そこで、総額として算出された47175文が3人分の旅費であると仮定すると、1人当たりの旅費は15725文となる。これをさらに江戸～京都間に要した日数(22日間)で割ってみると、1日平均714文を費やした計算になる。ここでは、この金額を富裕な江戸庶民による旅の1日あたりの必要経費として捉えておくことにしたい。

② 『伊勢参宮覚』(1845)にみる江戸近郊地の庶民の在地～伊勢間の旅費

次いで、江戸近郊地の庶民による在地～伊勢間の道中における旅費の傾向を『伊勢参宮覚』を通して垣間見ることにしたい。表3は『伊勢参宮覚』に記された当該区間の旅費の消費内訳を知るために作成したものである。また、彼らが消費した旅費の割合を示す目的で図3を作成した。

表3及び図3によれば、『伊勢参宮覚』における在地～伊勢間の旅費の総額は7048文であった。この旅は在地～伊勢間を16日間かけて移動しているので、総額を日数で割ってみると、1日平均約440文を費やした計算になる。これが、江戸近郊地の庶民による旅の1日あたりの必要経費である。

③ 江戸庶民と江戸近郊地の庶民による旅費の比較検討

ここで、江戸庶民と江戸近郊地の庶民の旅費を比較検討してみることにしよう。まず、双方の消費内訳のバランスを比べてみると、いずれも多い方から順に宿泊費、食費、交通費、社寺参詣関連費となっており、旅費の使い道の基本的なバランスに違いは見られない。

各項目に対する消費金額は江戸庶民の方が圧倒的に多いが、これは前述のように『道中記』が3人分の旅費をまとめて記載していることによる。そこで、

(19) 紀伊国屋長三郎「道中記」(1851)『ある商家の軌跡—紀伊国屋三谷家資料調査報告書—』千代田区教育委員会、2006、150頁。

(20) 同上書、150頁。

表3 『伊勢参宮覚』(1845)にみる江戸近郊地の庶民による旅費の消費内訳*

日付	移動区間	購入品・行動	計(文)
正月22日	在地～戸塚	食費、草鞋代、船代、宿泊費	275
23日	戸塚～小田原	食費、賽銭、御札代、船代、駕籠代、宿泊費	712
24日	小田原～箱根	食費、線香代、入湯代、髪結代、草鞋代、宿泊費	358
25日	箱根～吉原	食費、賽銭、駕籠代、宿泊費	823
26日	吉原～久能山	食費、草鞋代、駕籠賃、宿泊費	1009
27日	久能山～岡部	食費、賽銭、案内賃、草鞋代、宿泊費	487
28日	岡部～掛川	食費、船賃、ちり紙、草鞋代、川越人足代、宿泊費	492
29日	掛川～一ノ瀬	食費、書状送料、草鞋代、橋銭、宿泊費	300
2月1日	一ノ瀬～石打	食費、草鞋代、船代、御札代、賽銭、宿泊費	374
2日	石打～かとや	食費、宿泊費	309
3日	かとや～佐助	食費、船代、草鞋の紐代、御札代、賽銭、宿泊費	348
4日	佐助～池鯉鮒	食費、髪結い代、宿泊費	327
5日	池鯉鮒～甚目寺	食費、草鞋代、ちり紙、宿泊費	304
6日	甚目寺～富田	食費、御札代、賽銭、昼旅籠代、船代、船人酒代、宿泊費	431
7日	富田～津	食費、草鞋代、宿泊費	330
8日	津～伊勢	食費、船代	169

※田中国三郎『伊勢参宮覚』(1845)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、1～8頁、より作成。

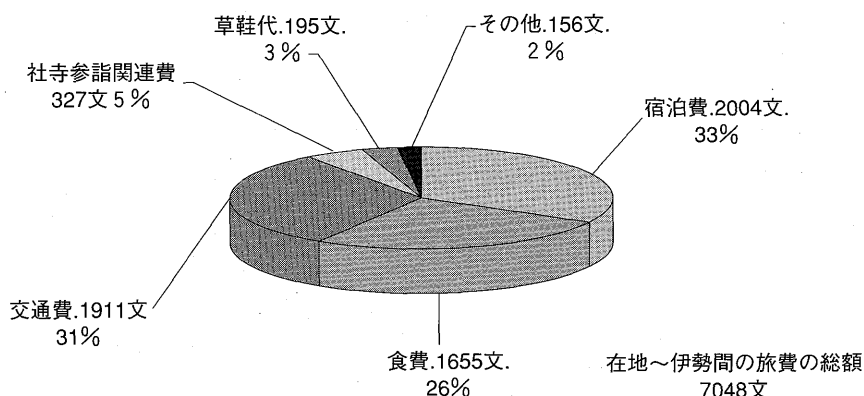


図3 『伊勢参宮覚』(1845)にみる江戸近郊地の庶民による旅費の消費配分*

※田中国三郎『伊勢参宮覚』(1845)『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、1～8頁、より作成。

江戸及び江戸近郊地の庶民が1人あたりに消費した金額を把握するために表4を作成した。

表4における両者の平均額を比較することによって、江戸庶民と江戸近郊地の庶民との間で生じた1日平均の消費金額の違いを知ることができる。これによると、1人当たりの交通費には殆ど違いがみられない。しかし、1人当たりの総額の欄をみると、江戸近郊地の庶民が約7048文であるのに対して、江戸庶民の方は約15725文であり、およそ倍額を費やしている。これを1日平均で計算すると、先にみたように、江戸近郊地の庶民が1人440文、江戸庶民は1人714文の旅費を使っていたことになる。ゆえに、江戸近郊地の「農民」による旅費の平均額を尺度として考えると、江戸の「豪商」たる紀伊国屋長三郎の旅は贅沢なものであったといえよう。それでは、この消費金額の差はどこで生じていたのであろうか。

最も顕著な差異を見出せるのが宿泊費である。『道中記』(1851)と『伊勢参宮覚』(1845)はほぼ同時期に行なわれた旅の記録であるため、両者の宿泊費の相違は物価の上下動によるものではなかったと推すことができる。おそらく、江戸庶民の旅の方は宿泊費のほかに酒宴や女郎遊びに興じるなどの楽しみをより多く享受していたために、こうした金額の相違が生じたものと推測される。例えば、江戸庶民による宿屋での遊興の様子は、江戸の商人であった扇雀亭陶枝が『鎌倉日記』(1809)のなかで「遊びめ五ツたり、芸婦人ふたり来たり、酒宴大に興事どもなり。」⁽²¹⁾などと伝えている。

また、食費について平均すると、江戸庶民の方が70文ほど多くの額を投じている。両者ともに道中の名物を頻繁に食べ歩いているが、江戸庶民の方が「茶代」などとして金を費やすことが多かったと見える。このことが食費の金額に多少の差異を生じさせていたといえよう。

さらに、社寺に賽銭として投じる額が江戸庶民の方がはるかに多額であったことや、彼らが社寺の御札や御守り、絵図、縁起などを頻繁に購入しているこ

(21) 扇雀亭陶枝「鎌倉日記」(1809)『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』吉川弘文館、1985、280頁。

とから、「社寺参詣関連費」として計算した平均額が江戸近郊地の庶民よりも60文ほど上回っていることが確かめられる。

このほか、長三郎一行の旅費の使い道として注目すべきは「施行」についてである。彼らは、江戸～京都間の道中で施行行為として計195文を費やしている。金額自体は小額であるが、その回数は22日間で8回におよんでいる。旅日記の記述をみると「十文 非人施行」⁽²²⁾「五拾八文 秋葉山道小供二遣ス」⁽²³⁾「出拾壹文 小供二非人」⁽²⁴⁾などとあることから、彼らの施行行為の対象が非人や子どもであったことが明らかとなろう。

このことと関わって、『世事見聞録』（1816）には、江戸のとある富裕な商人が伊勢参宮の旅をした際、洪水の被害によって飢饉にあえぐ街道筋の人々に対して多額の金銭を恵んだ旨の記述がみられる⁽²⁵⁾。こうして、富裕層の施行が時として街道筋の住民にまで及んでいたことが窺えよう。

道中での施行は必ずしも豪商などの富裕層に限られた行為ではなかったように思われる。江戸の一般庶民による旅のあり様を滑稽に描いた『東海道中膝栗毛』（1802～09）には、主人公が道中で「抜け参り」の子ども達に金銭を施行する場面が描写されているためである⁽²⁶⁾。ゆえに、道中での施行は必ずしも富裕層がその財力をしてなし得た行為であったとはいえ、中下層の江戸庶民も道中では施行行為をすることがあったと見なすことができよう。

一方、『伊勢参宮覚』の記述内容のなかに、田中国三郎一行が施行行為をした形跡は見受けられない。したがって、道中での施行とは日々現金収入を得る

(22) 紀伊国屋長三郎「道中記」（1851）『ある商家の軌跡—紀伊国屋三谷家資料調査報告書—』千代田区教育委員会、2006、151頁。

(23) 同上書、153頁。

(24) 同上書、153頁。

(25) 原文は下記の通りである。

「折節、東海道筋国々洪水ありし翌春の事にて、道筋の百姓ども困窮の体大方ならず、老爺・老婆・小兒など、飢饉・寒氣に堪へかね、道の端へ出て往来のものに物を求めしを見て、我も善根を施さんなどと自讃して、あまたの金銭を与へしといふ。」（武陽隠士「世事見聞録」（1816頃）『世事見聞録』岩波書店、1994、259頁。）

(26) 十辺舎一九「東海道中膝栗毛」（1802～09）『東海道中膝栗毛（上）』岩波書店、1973、79～82頁。

表4 江戸及び江戸近郊地の庶民による旅費の平均額の比較* (単位: 文)

	『道中記』(1851)				『伊勢参宮覚』(1845)	
	費用		1日の平均額		費用	1日の平均額
	3人分	1人分	3人分	1人分		
宿泊費	20350	6783.3	925	308.3	2804	175.2
食費	11668	3889.3	530.3	176.7	1655	103.4
交通費	7959	2653	361.7	120.5	1911	119.4
社寺参詣関連費	5448	1816	247.6	82.5	327	20.4
土産代	296	98.6	13.4	4.4	0	0
草鞋代	186	62	8.4	2.8	195	12.1
施行	195	65	8.8	2.9	0	0
その他	1073	357.6	48.7	16.2	156	9.7
総額	47175	15725	2144.3	714.7	7048	440.5

※表2及び表3を基に作成。

ことのできた都市民（商人・職人）に特有の行為であった可能性を提示しておきたい。

以上述べてきたように、旅費の総額やその内訳など金銭面からみれば、江戸近郊地の庶民の旅よりも江戸庶民の旅の方が贅沢であったことが示された。

ただし、ここで検討した『道中記』は豪商の旅の記録であることから、ここにあらわれた旅費の傾向を中下層の江戸庶民の旅にそのまま適用して考えることはできない。紀伊国屋長三郎は江戸～京都間の旅費は全て自費で賄ったと考えられるが、前述したように江戸の中下層の庶民は、その日常の収入から推して旅費の全額を個人で負担することは不可能であった。そのため、中下層の江戸庶民は後述するような「講」組織を利用して旅費を調達している。

一方、江戸近郊地の庶民の大半は講に加入して旅をしたが、その意味で両者の旅費の調達手段は同様であった。ゆえに、江戸の中下層の庶民が旅をする場合、その金銭消費の度合いは江戸近郊地の庶民と比べて大差はなかった可能性

が高い。

3. 旅費の調達手段としての講と銭別

近世後期の庶民は如何にして旅費を捻出したのであろうか。庶民が個人負担で旅にかかる費用を賄うことが困難であった近世においては、皆で旅費を出し合い数人を代参させる「講」の形式が好まれ、これを代参講と称した。そこで以下では、庶民が旅費の調達手段として利用した「講」や、有縁の人々から貰い受けた「銭別」について検討しておくことにしたい。

「講」とは一般に「宗教上・経済上その他の目的のもとに集まった人々が結んだ社会集団」⁽²⁷⁾と定義づけられている。日本の講は、仏典を講究する仏僧の集団を意味する語から発生し、のちには寺院で執行する仏教的法会を意味するようになったが、その後の変遷によって、金融的・経済的・社会的・政治的な諸機能を順次顕在化させていった⁽²⁸⁾。

近世においては「講のもつ宗教的意義はしだいに失われ、本来の精神を逸脱して、宴会や行楽を主とする形に墮落して来た」⁽²⁹⁾という。実際に、近世後期の江戸近郊地（世田谷地域）における講は、当該地域の農民が信仰を大義名分として娯楽に興じ得る時間を社会的に保証する役割を果たしていたことが指摘されている⁽³⁰⁾。

こうした状況下にあって、近世後期の江戸においては講員で積み立てた掛金を選抜者へ融通する形式をとる「代参講」が数多く存在していた。例えば、富士信仰を奉じる富士講は、江戸において俗に「八百八講」と称されるほどにまで普及していたといわれる。また、江戸及び江戸近郊地においては、伊勢講が多く結ばれていたとされるが、こと江戸に関しては後期の風俗を記した『嬉遊

(27) 仲村研「講」『日本史大事典 第三巻』平凡社、1993、12 頁。

(28) 桜井徳太郎『講集団の研究 桜井徳太郎著作集 第八巻』吉川弘文館、1988、13～14 頁。

(29) 桜井徳太郎『講集団成立過程の研究』吉川弘文館、1962、4 頁。

(30) 谷釜尋徳「近世農民の娯乐的活動を担った講の役割」『運動とスポーツの科学』13 巻 1 号、2007.12、27～46 頁。

笑覧』（1830）に「伊勢代々講今世町人等人数を定め釀銀を集め是を積み年を経て伊勢に参宮し太々神樂を奉る費用を設くるを太々講といふ」⁽³¹⁾と記されているように、江戸庶民による代参講としての伊勢講が相当に普及していたことが確かめられる。

ここで、江戸の富士講を例に「代参」のシステムを紹介しておくことにしよう。富士講研究の第一人者である岩科小一郎は、江戸において結ばれた富士講について次のように説明している⁽³²⁾。

「富士講の組織は、先達・講元・世話人の三役によって幹部が構成される。世話人の勧誘によって講員が集められ、世話人が講金の集金に歩く。おおむね三年ないし五年を一期として講を立てる。講員百人で五年の講が立ったとすれば、年々二十人ずつが登山し、五年で全員の登山が終ると収支決算して一期を終り、次の講員を募って講を立て直す。講員は五年間毎月講金を納めるが、これは自分の登山費用に講の維持費を加味したものを月賦で払っているわけである。したがって講の年期が長くなれば毎月の講金は安くなる。」

上記の岩科の説明によって、近世における江戸の富士講のシステムを知ることができるが、彼らは実に合理的な方法で旅費を捻出していたといえよう。代参講に限らず、講組織において何らかの代表者を選抜する場合の方法は主に籤引きであったといわれる。例えば、式亭三馬が文化14（1817）年に著した『四十八癖』には、江戸における講の代表格であった頼母子講（無尽講）⁽³³⁾に関する記述がみられるが、そこでの当選者の選抜方法も籤引きが採られている⁽³⁴⁾。

実際の代参講の掛金は、奥沢新田（現・世田谷区）で宝暦13（1763）年に

(31) 喜多村信節「嬉遊笑覧」（1830）『嬉遊笑覧』近藤出版部、1887、566頁。

(32) 岩科小一郎『富士講の歴史』名著出版、1983、243頁。

(33) 頼母子講とは「互助的な金融組合。組合員が一定の掛金をなし、一定の期日に抽籤または入札によって所定の金額を順次に組合員に融通する組織」（新村出編『広辞苑 第五版』岩波書店、1998）のことである。

結成された伊勢講で、結成当初は年間 400 文、近世後期には 600 文を積み立てたという⁽³⁵⁾。また、江戸の渋谷宮益坂で結ばれた山吉講（富士講の一種）は、江戸市中をはじめとして近郊農村にまで広く分布していたが、この講の掛金は低いところで年間 100 文、高いところで金 2 朱（約 800 文）であったと伝えられている⁽³⁶⁾。

このように、代参講の掛金は講によって異なるものであった。青柳は江戸の富士講を引き合いに出して、講が主に共同体や職種などを単位として構成されるものであるため、講の結成されている地域によって経済的な格差が生じると指摘している⁽³⁷⁾。つまり、江戸の繁華街で結ばれた講であれば、その構成員も必然的に富裕層が講員の多くを占めるが、逆に衰退した場末の講はそれほど裕福な者が構成員となっていなかったと推されるのである。

ところで、講の積立金は代参者にどの程度受け渡されたのであろうか。江戸近郊地の太子堂村（現・世田谷区）の富士講では、代参者 1 人につき金 1 両（約 6000 文）の旅費が渡されたといわれている⁽³⁸⁾。この金額に、先の検討によって『伊勢参宮覚』の総額から割り出した日ごとの平均額である「411 文」を当てはめてみると、14 日間程度の旅費が講金によって賄われた計算になる。

無論、青柳の指摘に即して考えてみれば、渡される講金にも地域的な格差があったことは言うまでもないが、ここで得られた数値に従えば、江戸近辺から 8 日程度で往復できた富士道中なら旅費の総額を講金で賄うことができたことになる。しかし、通常 2 ヶ月程度を要した伊勢参宮などの場合は、講金に自費や銭別を加えて旅費を捻出する必要があったといわねばならない。

近世後期の関東地方において広く普及していたのは「代参」形式の講であったが、中には「総参り」を計画する講もあった。多摩郡落合村（現・多摩市）の安政 4（1857）年の記録である『伊勢太々講連名帳』には「年二三度宛積

(34) 式亭三馬「四十八癖」（1817）『新潮日本古典集成 浮世床 四十八癖』新潮社、1982、296 頁。

(35) 同上書、21 頁。

(36) 世田谷区郷土資料館編『社寺参詣と代参講』世田谷区郷土資料館、1992、34 頁。

(37) 青柳周一「富士講と交通—江戸の富士講を題材に—」『交通史研究』33 号、1994. 5、18～21 頁。

(38) 世田谷区郷土資料館編『社寺参詣と代参講』世田谷区郷土資料館、1992、34 頁。

金いたし、五ヵ年相立候ハヽ、連中一同目出度参宮可致候事」⁽³⁹⁾と記されている。各々が積み立てた金額は定かではないが、彼らは年に3度の講金の積み立てを5年間にわたって実施することで、講員全員（この場合36人）で伊勢に旅する「総参り」を目論んでいたのである。

このようにして、講組織によって旅費の多くが賄われたが、旅立ちに際しては近隣や有縁の人々から「餞別」を貰い受ける慣習もあった。例えば、『伊勢参宮覚』の旅では、在地の村人30人から餞別として計1両2朱5貫600文（約12400文）を受け取っている⁽⁴⁰⁾。また、江戸深川を拠点に活動した旅芸人の富本繁太夫は、文政11（1828）年～天保7（1836）年にわたる旅の記録『筆満可勢』の中に、浦賀からの旅立ちの際に得意先などから1両を超える餞別を貰い受けたことを明記している⁽⁴¹⁾。

以上述べたような講組織や餞別という慣習の存在は、庶民の旅にかかる負担を経済的な面から軽減したという意味で、庶民を担い手とする旅の発展にとり看過できない要因であったといえよう。

なお、本稿で旅費の調達手段として紹介した方法以外にも、「借金」によって旅の費用を調達した事例が報告されている⁽⁴²⁾。しかしながら、江戸及び江戸近郊地について言えば、このパターンの旅費の調達に関しては史料的に確認しえないことを理由に、ここでは検討の対象から除外している。

4. 結び

本稿において検討した結果は、以下のように整理することができる。

1. 近世後期の旅日記を基に旅にかかる必要経費を検討した。その結果、旅に

(39) 「伊勢太々講連名帳」（1857）『多摩市史 資料編二 近世文化・寺社』多摩市、1996、516頁。

(40) 「参宮祝儀受納帳」（1845）『伊勢道中記史料』世田谷区教育委員会、1984、44～46頁。

(41) 富本繁太夫「筆満可勢」（1828～36）『日本庶民生活史料集成 第三巻』三一書房、1969、598～599頁。

(42) 山本光正「旅から旅行へ—近世・近代の旅行史とその課題—」『交通史研究』60号、2006.8、6～7頁。

出るには 1 日に 1 人あたり 400 文程度、長期間（2 ヶ月程度）に及ぶ場合には総額にして 4 両以上が必要とされたが、江戸及び江戸近郊地の庶民の収入から推して、一部の富裕層を除けば彼らが旅費を個人負担で賄うことは不可能に近いことが明らかとなった。したがって、近世後期における江戸及び江戸近郊地の庶民にとって、旅は多額の金銭消費を伴う贅沢な娯楽であったといわねばならない。

2. 江戸庶民と江戸近郊地の庶民との間に生じた旅費の金額や使い方の違いを探るべく、双方より旅費に関する記述が豊富に盛られた旅日記を 1 編ずつ抽出して両者の比較検討を試みた。その結果、両者の旅費の消費配分は多い方から順に宿泊費、食費、交通費、社寺参詣関連費となっており、基本的なバランスに違いはみられなかった。ところが、旅人 1 人が 1 日あたりに使った費用の平均額は、江戸庶民は 714 文、江戸近郊地の庶民の方は 440 文という数字が算出された。金銭面からみれば、江戸庶民（豪商）の旅の方が江戸近郊地の庶民（農民）の旅よりも豊かであったといえよう。
3. 江戸及び江戸近郊地の庶民の多くは、その日常の収入から推して旅費の全額を個人で負担することは不可能であった。そのため、彼らは講員から講金を募り、それを旅費として用立てる「代参講」に加入して、旅にかかる費用を捻出していた。講組織によって旅費の多くが賄われたが、旅立ちに際しては有縁の人々から「餞別」を貰い受けるという慣習もあった。こうした講組織や餞別の存在は、庶民の旅にかかる負担を経済的な側面から軽減したという意味で、庶民を担い手とする旅の発展にとり看過できない要因であった。

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金・若手研究（B）による助成を受けた研究成果の一部である。

—たにがま ひろのり・法学部講師—